

sample サンプル

折檻部屋の  
風夏夏の

S M小説 荒縄工房  
あんぷらぐど著

sample サンプル

S M 小説

折檻部屋の

風夏

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

sample サンプル



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。

その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにやふにや」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

# 目次

転がり込む 6

媚びる 3 1

脱ぐ 4 5

オナニ 1 5 8

股裂き 7 0

散歩 8 1

謝罪 9 3

外飼い 1 1 8

クマキ 1 2 7

叩き 1 3 6

標的	1	5	5
遊戯	1	7	3
貸し出し	1	9	4
浣腸	2	0	4
髷られ人形	2	1	4
手加減無用	2	3	1
便器	2	4	9
ドライブ	2	6	9
奥付	2	9	5

## 転がり込む

「清美さん。お願いです。しばらくでいいので、置いていただけませんか？」

そのアパートは思った以上に狭く、散らかっていました。薄いドアを開けると靴でいっぱいの玄関。そのままキッチンから奥の部屋まで見通せるのですが、荷物があふれ返っています。ゴミ屋敷といってもいいぐらいです。

「ムリ」

にべもなく、ガムをくちやくちやさせて清美は言い

sample サンプル

ます。表情はありません。汚れたグレーのジャージ。髪はボサボサです。

同級生でした。お互い、社会人になってから、一年ちよつと会っていないけど。心はつながっているのではないかと勝手に信じていました。

清美は百八十センチを少し越えていて、体重も九十キロぐらいです。しばらく見ない間にまた太ったんじゃないでしょうか。部屋が小さく見えるのはそのせいかもしれません。小柄なわたしとは大違いです。

黒人の血が入っているせいか、浅黒くて、女子プロレスラーなら間違いなく悪役です。怒ると鬼のように

なるのを、以前、見たことがあります。

わたしは彼女をひと目見たときから、おびえていました。ですが、みんなが恐れる彼女に憧れ、友人として三年間、一緒にいる時間が一番長い仲になっていました。

すごく怖い彼女。感情の起伏が激しく、一緒に泣いたこともあるし、一方的にももの凄く怒られたこともありました。

恐ろしいときの清美がわたしには忘れられないのです。

いろいろな意味で、わたしは彼女が好きなのです。



だから困ったときに、真っ先に思い出したのも彼女でした。

久しぶりに会ったのだから、話ぐらいはあるかと思つたのに、わたしが持って来たシュークリームだけ受け取るとすぐ追い返そうとするのです。

「お願いです。わたし、ほかに行くところがないんです」

「ふーん、それで？」

清美はニコリともしません。

「わたしたち、友だち、だったじゃない？」

「友だち？」

わたしは内向的で友人はほとんどいませんでした。だから彼女を友人だと思ったかっただ。お互いに確認したことはありません。でも、普通の学校の友人以上の関係があると思っていました。

清美はいじめられたり、無視されたり、恐れられていましたが、友人なんて必要ないと思っっているようでした。だから、彼女はわたしのことを、わたしほどには思っていないかっただのかもしれない。

だけど、この大事な場面で、それを思い知るのは、つらいです。

「そんなこと言わないで。一緒にいるんなこととしてき

たじやない」

「ふざけないで。あたしが哀れだと思っつてつきまどつてたんでしょ」

「そんなことない」

「あたしがひどい人間だつて、知ってるでしょ」

怖いです。それが清美の魅力なのです。わたしは恐ろしい鬼のような彼女に、あえて身を任せようと決めたのです。それしか生き延びる方法はないと思つたから、ここに來たのです。身を捨ててこそ……。

そう、この体を清美に。

自然に涙が出てきてしまいます。

「なによ。泣いたってダメよ。そういえば、風夏はなにかと言えは泣いてごまかしてたわね」

「わたし、清美のこと大好きなの。ホントに好きなんだから」

泣きじやくっていました。

この二カ月ほどの間に起きたさまざまなのが、積もり積もっていたのだと思います。

少しだけ清美に表情が浮かびました。

「ふーん」と鼻息。

「あんたさ、いま頃そんなこと言って、都合がよすぎない？」

「だって、連絡もくれずに引越してしまっただじやない」

「卒業ってそういうことだろ？ お互い社会に出たんだからさ。学生じゃないんだからさ。あんたはあたしがここにいるのを知ってて、ハガキひとつ寄こさなかつた」

「そんな……」

メールはしたのですが、携帯の番号を変えたのか、電話もメールもつながらなかつたのです。

「あんた、大学行ってんの？」

「受験なんてムリでした。いまは、もう家もないんで

す」

「ふーん」とまた、鼻息です。

「あんたんち、会社やってたじやないさ」

「会社、潰れちやったんです」

清美と会った頃、わたしはお金持ちの家にいるつもりでいました。好きなアイドルのCDも最新のスマホも、ファッションも。なんでも手に入りましたし、コンサートや海外旅行もよく行っていました。ずっとこういう生活が続くんだと思っていたのです。

それが昨年の一ヶ月を過ぎて受験というあたりから経営がおかしくなっていたのです。高層マンションの

最上階を売り、そのほか別荘とか、投資用のマンションも売って、郊外の家を買ったのですが、狭くて暗い家でした。思えばあれが父母の最後の贅沢だったのですが……。

受験どころではありません。そのことは清美にも学校のほかの誰にも黙っていました。

卒業はできました。このまま生活は安定するかもしれないと思っていました。

大学はあきらめて仕事をしました。といっても、フリーター。アルバイトばかりの毎日で、正社員にはなれません。資格を取るとか、勉強もしたかったので

が、時間的にも経済的にも厳しくて、思うようにいきませんでした。

そして、一年。将来のことなんて考えられませんでした。したが、住む家はあるし父母も明るく元気でした。うまく行っていると信じていました。これ以上悪くなることはない、と思っていました。

でも、二カ月前。わたしの知らない間に、父母の経営する会社は倒産していたのです。母が社長、父が会長の健康食品の会社でした。

二人はわたしになにも言わず、「得意先と香港に接待旅行に行く」と言って出て、そのまま帰らなかつたの



です。

ゴミ捨て場のようなところで二人は拳銃自殺したそうです。わたしは香港に行きたかったんですが、なかなか手続きがうまくいかず、数日して遺骨だけ戻ってきました。そして二人が多大な借金を負っていたこともわかり、家は追い出されて、なにもかも失い、こうして路頭に迷っているのです。

アルバイトもやめるしかなく、残されたわずかな現金でマンガ喫茶などを転々としてきました。

もう限界。誰かに相談したい。

その時、清美しか思いつかないのです。

彼女はシュークリームが好きでした。

節約のために昨日からなにも食べていませんが、残った小銭で、シュークリームを二個買いました。残りもここへ来るためのバス代でほとんど消えています。

清美がどこに行ったのか、わたしは知っていません。運送会社に就職し、その会社の近くでアパートを借りていることを、清美の両親から聞いていたのです。ただ、それを知った頃は、なにも言わずに姿を消した清美に腹を立てていて、連絡は取っていませんでした。

東京湾に近い埋め立て地です。用事がなければ行かないところで、なにかのついでに寄ることなどあり得

ない不便な場所です。

「倒産した会社経営者が香港で心中？ ああ、なんか、そんなニュース、聞いたかもしれないわ。あれ、風夏のうちのことだったんだ」

清美は少し口元を歪めました。薄笑いのように見えます。

「もう、どうしたらいいのか、わからないの。相談したくても、頼れるのは清美しかいないの」

「ふーん」

警戒心は解けたようです。

「ここに何日ぐらい、いるつもり？」

「何日って……」

ずっと一緒に暮らせないかと頼むつもりでした。見透かされたようです。

「一日か二日ならいいけど、明後日の夜にはいなくなつてて」

「どうしてですか」

「うるさいわね！　ここはあたしの家なんだからね。」

あたしのルールが守れないなら、いますぐ帰りなよ！」

ああ、怒つちやう。

もうちよつとで今日、寝る場所が確保できるのです。

そこにいるのが鬼のような清美だとしても。いえ、鬼だからこそ。

「わかりました。わかりましたから、どうかお願いします」

一日でも時間をもらえれば、ちゃんと話をしてお願いできるかもしれません。それを信じるしかないのです。

「しようがないな。じゃ、一泊だけよ」

靴を脱いで大きな荷物をそこに置きました。スーツケース一つ。ほかの荷物は別の場所に置かれています。が、引っ越し先がないし、お金もないので取りに行く

ことができません。

「あんたさ、働いているの？」

「はい」

ウソをついていました。

「どんな？」

「お弁当屋さん」

やっていたことはあるのです。借金取りにバレて行けなくなつてしまつたのです。

部屋に上がると、生ゴミのニオイがしています。履き古した靴下のニオイ。ブーツのニオイ。そして清美の体臭。

なんだかすごく懐かしいのです。大好きな清美の二オイです。

「その辺で適当に座って。うちはなんでも適当なですよ」

たくさんの荷物の間に敷きっぱなしのマットレスと布団が見えています。

清美は体を揺するようにして冷蔵庫を開けると、「これでも飲む？」と紙パックに入ったジュースを差し出しました。

口が開いていて、日付を見ると一カ月ぐらい前のものです。

「コップは？」

「そんなものいいじゃん。友だちだろ」

彼女はわたしから紙パックを奪うと、紙の口を折つてそこに唇をつけて飲みました。

「ほら。うまいから」

「はい」

断るとせつかくの機嫌が悪くなりそうだから、わたしは真似して飲みました。

思ったほどまずくはなくて、ホツとして笑顔になりました。

すると清美も笑います。



紙パックを冷蔵庫に戻したら、その下をさつとゴキブリが通り過ぎました。

ドキツとしました。

それを清美は足で踏みつけました。黒いすべりやすい体が一瞬で潰れて、中から気持ちの悪い汗が出てきました。それを古新聞をちぎって拭き取り、臭気を放つゴミ袋に投げ込みました。足の裏も古新聞で拭いています。

「風夏。あんた、かわいいね。誰かに似てるね」

「父に？」

「バカ。そういう意味じゃねーよ。芸能人だよ。三十

人ぐらいで歌って踊ってる連中がいるだろ。あの中の誰かに似てるわ」

誉めているのでしょうか。でも、「誰か」なので、どうもよくわかりません。

「初めてだわ。そんなこと言われたの」

「そうなの？ そうだ、彼氏は？ あんた、そうやっていると、けっこうまともに見えるじゃない。男に不自由しないだろ」

同級生なのに、ずいぶんと大人ぶっています。言い方がとても下品です。

「あん？ どうなのさ、風夏」

「ぜんぜん、モテたことないわ」

弁当屋でおやじに言い寄られたことはありましたが、ほとんど冗談のようなもので、そこで一番若くて、職場になじめないわたしをからかっていたのです。

「うそついたらダメだよ。あたしはウソが大嫌いなんだからね」

笑っています、清美が怒ったら怖いのです。

わたしは清美の怒ったところが大好きなんです。この瞬間をずっと求めていたのです。

「ごめんなさい。ウソをつきました」

わたしは目をつぶって頬を差し出しました。

懐かしい。学生時代を思い出します。

「え？」

清美は一瞬、戸惑ったようです。

「ウソ？ おまえ、親友にウソをついたの？」

「はい。わたしは職場でモテモテで複数の男と付き合っていました」

むしろこれがウソです。だけど、そう言ってしまいたかった。そうしなければ清美が怒ってくれません。

「覚悟しなさいよ」

「はい」

薄目を開けて見ていたら、清美はプロレスラーのよ

うに太い腕を振り上げ、大きな手の平をこちらに向け  
ています。

あの清美が戻ってきてくれたのです。わたしだけの  
恐ろしい清美。鬼の清美。

目をつぶります。

「あつ」

左頬に強烈な衝撃があつて、わたしはそのまま敷き  
っぱなしの布団に倒れました。

最後に叩かれたときよりも、何倍も痛い。体重が違  
うだけじゃなく、手加減をしなくなつたのです。

学生の頃は、清美は教師にも生徒にも目をつけられ

ていたので、わたしがいくら「もつと強くぶつて」と頼んでも、跡が残らない程度にしかやってくれませんでした。いまはもう、そんな制約はないのです。

汚い布団に倒れて、涙を流しながら、わたしはゾクゾクしていました。ここに来たのは間違いじゃなかったのです。

清美は恐ろしい。だけど、だからこそ、わたしはここに置いてもらえるかもしれません。

## 媚びる

「ウソは許さないよ。二度と言うんじゃないよ」  
清美が怒鳴ります。

「ご、ごめんなさい」

見上げるとわたしの上に清美が立っています。

わたしの、めくれ上がったスカートの裾を掴んでい  
ます。

「こんなもの着てさ。カワイ子ぶったやつ、あたし、  
大嫌いなんだよね」

ぐいっと引っ張ります。

「ホントにごめんなさい。ウツはつかないから」  
頬がジンジンしています。ボウツとなっています。

臭いこの部屋で、夢にまで見た恐ろしい清美にいま  
乱暴されようとしているのです。妄想していたシチュ  
エーション。

彼女は怒ると突然キレて手がつけられないのですが、  
根はすごく優しいのです。優しさと強烈な暴力。それ  
が同居しています。

それが清美の魅力なのです。

「なにをするの、清美。触らないでよ」

「なんだって！」



「こんなゴミ溜めみたいな部屋に住んで、えらそうに言わないでよ。汚い手で触らないで！」

「ふざけるな！」

清美は怒りました。わたしのスカートを引っ張って、引き剥がそうとしました。

「あつ」

スカートは裂けてしまいました。

「そうだ、風夏。あんたうちにいるなら、そんな服じや、いさせないよ」

「え？」

「あんたが学生の頃に、誓ったこと、忘れたの？」

ドキドキしています。清美があれを覚えていてくれた。うれしい。

「いいかい。あんたはね、大人になったら、あたしの  
奴隷になるって言ったんだよ」

ただ、黙っています。

「誓ったんだよ。覚えてるだろ？」

わたしは、じつとしています。

「奴隷ってなんだ、どんなことするんだって、あたしが聞いたよね。そうしたら風夏はなんて答えたんだっけ？」

体が痺れたようになっていきます。

うれしくてまた涙が出てきます。

もし清美がまだそのことを覚えていて、わたしをカワイイと思ってくれているのなら、ここに置いてもらえるかもしれないのです。

わたしはその場で正座しました。

そして大人になったことを証明したくて、あの頃はそこまではできなかつた土下座をしました。借金取りや父母が迷惑をかけたらしい人たちに頭を下げる気はまったくなくなつたのですが、清美にならいくらでも土下座できます。

「清美さま。わたし風夏は身も心も清美さまに捧げま

す。奴隷としておそばに置いてくださいませ。奴隷は清美さまのご命令になんでも従います。風夏が悪いことをしたり、清美さまの気分がよろしくないときは、ご自由に叩くなり蹴るなり、お好きになさっていただいて構いません。気晴らしにお使ください。躡けのために厳しく折檻してください。そして、ボロボロになつて使いものにならなくなつたら、どこにでも捨てていただいて構いません」

学生のとくに考えた言葉。

忘れるはずがないのです。必死に考えて、夢の中でも何度も唱えて。

ただ、そこに「どこにでも捨てて」と付け加えていました。ゴミ捨て場で無惨に死んだ両親のことが重なります。わたしたち、なんの価値もないゴミみたいな家族だったのです……。

「じゃあ、そんなきれいなカツコ、する必要はないよね」

「は、はい」

「久しぶりに風夏の体、見せてもらおうかな。だいぶ前の夏だったよね。あれから少しは女っぽくなつた？」

清美は冷蔵庫の上にあるタバコを手にして、オイル

ライターで火をつけると、煙をふーっと吹き出しました。

なんてステキなんでしょう。清美はタバコを吸うのです。わたしの父母も、アルバイトをしていた先でも、ほとんどタバコを吸う人はいなかったのですが、清美のその姿は、いかにも似合っていて痺れます。

わたしはおそらくすぐうれしそうな顔をしていたと思います。喜んで上着のボタンに手をかけました。

「待って」

清美は大股で部屋を横切り、ガラス窓をバーンと開け放ちました。

外の音と風が入ってきました。生暖かい春の空気。

アパートの外は、小さな庭のような空き地。駐車場。そして幹線道路があり、その向こうは倉庫や運送会社が並んでいます。

今日は休みなので、あまり車も通りません。海が近いのか風に潮の香りも混じっています。

見慣れない寂しい風景。歩いている人なんていません。

「こっちへ来なよ」

陽が注ぐ窓の近くに、立たされました。

「脱ぎな」

彼女は陰にいて、ときどき赤くなるタバコの火が見えています。表情はわからなくなりました。

学生時代、清美の前で裸になったことは何度かあります。一緒にいられる最後の夏休み。外でした。遊びに行った町の、小さな公園。女子トイレ。そこで全裸になりました。

「どうか、風夏の体をご覧ください」

わたしの中では清美に命じられてさせられたシチュエーションですが、実は自分からやって、見てもらったのです。

あの興奮がよみがえります。



「風夏の裸を見てください」

「いいよ。ゆっくり脱ぎなよ」

清美に見てほしい。恥ずかしい姿を。

わたしにはもう、なにもないの。家族も家も仕事も。だから裸がふさわしい。

ボタンをゆっくり外して上着を脱ぎました。

汗を吸っているブラウス。それもゆっくりとボタンを外していきます。少し冷たくも感じる風ですが、むしろ心地がいいです。

清美に気に入ってもらいたい……。

ピンクのブラ。

「かわいいの、つけてんじゃないの」

清美が指先で谷間のフロント部分をぐいっと引き上げます。

「少し大きくなつたんじゃない？」

「毎日もんでいました。ブラのサイズはいまEカップです」

「ホントに？ 前はCだったわよね」

覚えていてくれたんだ……。

ボウツとなります。

雀がチュンチュンと鳴いています。

ゴーツと大型トラックが通り過ぎました。

すぐに抱いてほしい。

清美はふざけてプロレスとか格闘技の技をかけることがあつて、すごく痛くて苦しいけど、あれがわたしは大好きでした。彼女の太ももに頭をはさまれたときのこと忘れられません。

こうした一つ一つの思い出は、ごくたまにしかなかったことばかりです。おみくじで大吉を引いたときしか覚えていないように、大事にしてきました。

清美はシャイなので、よほどその気にならない限り、わたしを乱暴に扱ったり、ふざけたりしないのです。

よく二人で一緒にいました。が、いつもなんにもしま

せんでした。ただ一緒にいて。ゲームしたり、話をしたり、マンガを読んだり、お菓子食べたり。それだけ。三年の間に、わたしが夢に見るような清美とのふれ合いがあつたのは、ほんの数えるほどです。

でも妄想だけはすごく膨らんでいたのも、現実とは大きなギャップがありました。

受け入れてくれるのかどうか、不安でしようがありません。

「さつさと脱ぎなよ」

清美が言うので、わたしは「はい」と返事してブラを取りました。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一四年十二月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど (荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ

● ブログ「荒縄工房」

● 公式ウェブサイト

● 荒縄工房 S M 研究室

● 今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。